

投稿論文

作家論としての「ケアのはじまりとしての 傷つきやすさ」

「アルコール依存症の患者」と「家族は風のなか」
における個別なものへの応答*

井出 達郎

はじめに

2020年に発表された石塚久郎監訳『医療短編小説集』には、他の多くの作家が一つの作品のみ収録されているのに対し、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズとスコット・フィッツジェラルドだけが二つの作品を収録されている。ウィリアムズの方は実際に医者であったという事実を考えれば、ウィリアムズと並んでフィッツジェラルドの二作品が収録されていることは、フィッツジェラルドという作家における、これまでの一般的なイメージにはなかった「医療」というジャンルとの関わりの大きさを示しているだろう。

本論文は、『医療短編小説集』に収録された二つの短編「アルコール依存症の患者」と「家族は風のなか」を、2017年の拙論「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ—F. スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』における傷からのつながり」において論じられた、「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」という主題から読む試みである。2017年の論考は、まず『グレート・ギャツビー』冒頭から「傷つきやすさ (vulnerability)」というキーワードを、「ニック・キャラウェイ」という名前から「ケア (care)」というキーワードを設定する。そして、アメリカにおける

* 本論文は、日本F. スコット・フィッツジェラルド協会 2021年7月3日のワーク・イン・プログレスで口頭発表した内容を加筆・修正したものである。

セルフメイド・マンの理想からは克服するものであるはずの傷つきやすさを孕んだ自己のあり方が、自己完結できない傷として自己が外へと開かれる契機となり、他者とのケアというべき関係をもたらしめている、という解釈を提示した。本論文はそのケアという関係の内実には「個別なものへの応答」という主題を新たに追加することで、二つの短編への応用を試みる。そもそもフィッツジェラルドの作品は、自身のアルコール依存症や妻ゼルダの精神疾患という直接的に医療に関するモチーフのみならず、短編「カットグラスの鉢」における「ガラス」、短編「冬の夢」における「失われる若さ」、エッセイ「崩壊」における「ひび」など、壊れるもの、移ろいゆくもの、割れるものといった、傷つきやすさのモチーフに溢れている。その意味で、「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」という主題は、キーワードを『グレート・ギャツビー』から抜き出しているにもかかわらず、個別の作品論という枠を超えて、フィッツジェラルドの作家論として発展させる可能性を備えているだろう。二作品という限定された範囲を扱いながらも、本論文はその可能性の端緒を示したい。

1. 『グレート・ギャツビー』における「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」再考——個別なものへの応答としてのケア

「フィッツジェラルドと医療・看護というテーマは、フィッツジェラルド研究の中でも未だ空白地帯である」（石塚 338）と言う状況の中、2017年の拙論は、『グレート・ギャツビー』を「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」という視点から読み解いている。まず「傷つきやすさ (vulnerability)」というキーワードは、作中の冒頭の言葉から抜き出されている。

In my younger and more vulnerable years my father gave me some advice that I've been turning over in my mind ever since.

“Whenever you feel like criticizing any one,” he told me, “just remember that all the people in this world haven't had the advantages that you've had.”
(*Gatsby* 1)

「僕がまだ今より若く、傷つきやすかったころ、父が僕にある助言を与えてくれた。それ以来僕はその助言を繰り返し反芻している」という言葉とともに、傷つきやすさは、語り手のニックの若き日の状態として提示される。そしてその傷つきやすさは、直後に回想される父親の忠告が、“vulnerable”の定義の一つである「批判

(criticize)の対象になりやすい」という状態と関連しているように、父からの助言という「気遣い (care)」を受ける原因としてある¹。傷つきやすい状態とは、一方では、他者から暴力を被る状態として、一般には否定的なものともみなされがちである。しかしこの『グレート・ギャツビー』の冒頭では、それが同時に、人間の生が一人では決して完結しえないという事実、自分の生が他の生の援助を必要とするという事実を露呈させることで、他者との関係を生み出す契機にもなる、という面が現れている。

2017年の論考が『グレート・ギャツビー』から読みとる他者とのつながりを生むものとしての傷つきやすさは、“vulnerability”という概念そのものをめぐる近年の論考によって補強することができる。例えばジュディス・バトラーは、ひとつの「この生」が他者の生と根源的に絡まりあっているという事実を明らかにし、近代的な自己完結的な自己のあり方をその他者との関係から問い直す一連の論考において、“vulnerability”をひとつの重要なキーワードとして用い続けている²。またエリン・C・ギルソンは、“vulnerability”が共感、関係性、共同性を学ぶ土台としてであると述べ、それを端的に「開かれ (openness)」と定義し、そこに、自己と他者との能動／受動の関係が極めて曖昧になる関係が生まれると指摘している³。傷が体に裂け目を作るということそのままに、傷つきやすさとは文字通り、自己の自己完結性が暴力的に破壊される可能性である一方、自己を他者へと開くという積極的な意味も持ちうるのである。拙論は、ニックがギャツビーに大きな関心を寄せるのがギャツビーの傷つきやすさが露呈されることであることを指摘し、両者のつながりを傷つきやすさから論じている点で、こうした“vulnerability”に積極的な意味を見出す論考と響き合っている。

では、傷つきやすさを通して生まれるニックとギャツビーのつながりとは、具体的にどのような内実を伴っているのか。2017年の論考は、「ニック・キャラウェイ」という名前から「ケア」というキーワードを引き出し、それが自己と他者との境界が曖昧になる関係であるとしているが、ではその曖昧な関係とはどのような意味を持つのかという点において具体性を欠いている。自己と他者との境界が曖昧になってしまうのであれば、そもそも関係を結ぶはずの自己と他者というそれぞれ個別な存在が消えてしまうのではないか、そのようなかたちで曖昧になってしまった後には何が残るのか、そうした反論に拙論は答えていない。それゆえ、そのケアというキーワードがどれくらいフィッツジェラルドという作家の独自性を説明できるのか、それを作家論として発展させることができるのかについて、文字通り曖昧なままにとどまっている。

本論文は、特に 2017 年の論考を作家論に発展させるにあたり、傷つきやすさからはじまるケアという主題に、「個別なものへの応答」という内実を新たに読み込む。個別なものへの応答というあり方は、ギャツビーの死に対するニックが感じる“responsible”という感情にみることができる。死というギャツビーの傷つきやすさそのものと対峙したニックは、ひき逃げ事件の犯人という批判に対して全くの無力になったギャツビーを前に、ギャツビーに対する噂や憶測に対して、自分が答える「責任がある」という思いを持ち始める。

At first I was surprised and confused; then as he lay in his house and didn't move or breathe or speak hour upon hour it grew upon me that I was *responsible*, because no one else was interested—interested, I mean, with that intense personal interest to which everyone has vague right at the end. (*Gatsby* 172; emphasis added)

ここでニックは、自分以外に関心のあるものがないという理由から、「動かず、息もせず、話もしない」ギャツビーと対峙する中、自分に「責任がある」という思いが湧き上がってくるのを感じているが、このニックの責任の感覚が特異な点は、そこに明確な理由が存在しないことである。確かにニックはギャツビーと友情のような関係を結んだように見えるものの、生前のギャツビーがニックに対して言っていた「親友 (old sport)」とはひとつの捏造であり、そもそもギャツビーがニックに近づいたのもデイジーという別の目的があったように、ニックがギャツビーに対して責任を感じなければならない客観的な理由は極めて曖昧である。事実、「自分に責任があった (I was responsible)」という感覚をめぐる、「なぜならば (because)」とニックが述べているのは、「誰も関心がなかったから」という、それだけでは極めて「曖昧 (vague)」な理由でしかない。ニックが死後のギャツビーに感じるこの責任は、誰に言われるわけでもなく湧き上がるもの、むしろ、誰にも頼まれないからこそ湧き上がるものとして、通常の“responsibility”とは異なるものになっている。このニックの特異な責任を解釈するうえで極めて示唆的なのが、國分功一郎による責任をめぐる論考である。國分は、現代の責任という概念が実は原因がはっきりしない出来事の「犯人探し」をするために作られたものではないかと主張しながら、その根源的な問い直しを「応答」という視点から次のように行なっている。

責任（レスポンシビリティ）は応答（レスポンス）と結びついている。応答とはなんだろうか。それは返事をする事だが、返事をするといっても応答において大切なのは、その人が、自分に向けられた行為や自分が向かい合った出来事に、自分なりの仕方で応ずることである。自分なりの仕方でということころが大切であって、決まりきった自動的な返事しかできていないのならば、その返事は応答ではなくて反応になってしまう。（國分、熊谷 4-5）

國分は、この応答としての責任とは、「誰に頼まれたわけでもない」のに「何か自分はやらなくてはならないと感じる」ものであると論じている。ケアという主題からニックが死後のギャツビーに対して感じる責任を考えるうえで、國分の責任／応答をめぐる論考は極めて示唆的である。それは、“I found myself on Gatsby’s side, and alone” (*Gatsby* 172) という言葉とも共鳴しながら、ニックがギャツビーに感じた“responsibility”が、國分のいう応答であるという読み方を喚起させる。

この応答としての責任のもう一つの重要な特徴は、それが「自動的な返事」でない「自分なりの仕方」であるかぎり、常に個別なものへの応答になる、という点にある。ケアをめぐる近年の論考の中で、村上靖彦は、ケアを必要とする病や貧困の経験とは偶然に満ちた経験、「なぜ私が」という理由に対する答えを徹底的に無化する経験であり、それゆえに「個別の体験からしか見えてこないもの」（村上 v）に関わるものであると指摘している⁴。「反応」としての責任がいくらでも反復可能であるのに対し、応答としての責任とは、「明確な理由」を土台とすることができないために、常にその場その時にのみ有効な仕方にならざるをえない。そこでは、反復不可能な個別なものへの応答こそが要請されるのである。

だが、なぜケアにおける他者への責任／応答感覚について明確な理由がないことが個別性に帰結するのか、明確な理由があつてなおかつ個別なものに応答するということはないのか、という疑問はあるだろう。鷺田清一のケアをめぐる論考は、こうした疑問に対するひとつの答えとして参照することができる。鷺田は、ケアという関係において、意味が一つの抑圧となり、意味内容の外にある矛盾や逸脱を取りこぼすことがありうることを指摘する。事実、精神科医と患者との関係のなかで解釈をあえてしないという治療法に言及しながら、ケアとは意味の外でおこなわれるものではないかと問いかける。

他人へのケアといういとなみは、まさにこのように意味の外でおこなわれるものであるはずだ。ある効果を求めてなされるのではなく、「なんのために？」

という問いが失効するところで、ケアはなされる。こういうひとだから、あるいはこういう目的や必要があって、といった条件つきで世話をしてもらうのではなくて、条件なしに、あなたがいるからという、ただそれだけの理由で享ける世話、それがケアなのではないだろうか。(鷺田 201)

鷺田がここでいう「あなた」とは、「目的や必要」、「条件」から徹底的に引き離されているという意味で、本論文の「個別なもの」そのものにほかならない。自身以外の誰もいないという中で、“The Great Gatsby”と題した物語をニックが語っていることは、その題名の定冠詞に含まれる特定のニュアンスとともに、ニックとギャツビーのケアという関係の内実が、何よりも個別なものへの応答であるという解釈を強く示唆している⁵。

2. 「アルコール依存症の患者」——傷つきやすさからの逃避、個別なものから「一つのケース (a case)」へ

『グレート・ギャツビー』から個別なものへの応答という主題を見出し、その視点から「アルコール依存症の患者」を読もうとするときに示唆的なのは、二つの作品のタイトルの対照性である。前者の *The Great Gatsby* は、“the”という定冠詞と“Gatsby”という固有名によって、ニックのケアが最終的に浮き彫りにする個別性の正確な表現になっているのに対し、後者の“An Alcoholic Case”は、“an”という不定冠詞によって、ケアの対象であるはずの患者の個別性が完全に消去されてしまっている。本論文ではこの「アルコール依存症の患者」を、「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」という主題と深く関わりながらも、看護師が患者の傷つきやすさから目を逸らし、最終的にはその個別性を排除してしまったために、応答としてのケアに至ることができなかった作品として提示する。

まずこの作品と傷つきやすさという主題との関連は、渡邊俊が論じているように、「バラバラに砕けたガラスの破片」が「作品を通底するイメージとして機能している」(渡邊 41) という点にみることができる。看護師と患者とのやりとりの中で割れる酒瓶のみならず、看護師紹介所とホテルとの間のバスの窓のひび割れ、そして、アルコール依存症の患者が抱える戦争での傷は、傷というイメージを作品全体にわたって喚起させ続けている。それゆえ主人公の看護師は、まさに物語を通して傷つきやすさに常に晒され続けていると言ってよい。

ではこの作品の傷つきやすさというのは、具体的にどのような内実を伴っているのか。それは何より、看護師の思うようにならなさとして提示されている。“Let—go—that—oh-h-h! Please, now, will you? *Don't start drinking again! Come on—give me the bottle. I told you I'd stay awake giving it to you. Come on*” (“Alcoholic” 23) という冒頭の看護師の言葉は、ダッシュやコンマによる文の中断、“please”や“come on”という嘆きに満ち溢れ、看護師の期待を患者が絶えず裏切る状態をわかりやすく伝えている。傷つきやすさを開かれとして定義したギルソンを再び援用すれば、ギルソンもまた、こうした思うようにならなさを、傷つきやすさという概念と強く結びつけ、傷つきやすさの経験とは、誤謬性、変容性、予想不可能性、コントロール不可能性の現実を突きつけられることであると論じている⁶。冒頭の患者に対する看護師の言葉は、まさにギルソンの傷つきやすさの定義をそのままに体現している。

思うようにならなさとしての傷つきやすさに晒される看護師は、一見すると、ケアという行為を行ううえで、極めて否定的な状態に置かれているように思える。しかし、ケアのはじまりとしての傷つきやすさという視点からすれば、その状況はケアという行為にとって、逆説的に、重要な意味こそを帯びている。それは、思うようにならないゆえに、看護師にとって患者は常に個別なものとしてある、ということである。事実、傷つきやすさの只中にある当初の看護師は、患者を他の患者とははっきりと区別している。疲労の中、看護師は以前にカリフォルニアで担当したユダヤ人の高齢の男性のことを思い起こすものの、その思い出はすぐ、今現在担当している「この患者」への思いに戻ってくる。“I guess if I hadn't liked him I wouldn't have stayed on the case” (“Alcoholic” 24) という看護師の思いは、カリフォルニアで担当した患者とは明確に区別される、「彼 (him)」という個別なものに向けられている。何よりも見逃せないのは、「彼が好きだから」という「理由」である。看護師が言っているのは、「看護師だから」という職業上の理由では決してない。むしろ、本来は患者を見る理由となるはずのものが結果となることで、医療現場における常識的・機械的に扱う患者という意味の外にある「彼」の個別性を際立たせている。ケアという関係が個別なものへの応答であるならば、冒頭の場面の看護師の思うようにならなさは、ケアの対象の個別性と向き合っている点において、ケアの関係の可能性をむしろ積極的に感じさせるものとしてある。

冒頭で示されたケアのはじまりとしての傷つきやすさは、しかし、看護師自身によって排除されていくことになる。患者の傷つきやすさに対する看護師の否定は、まず、彼女が患者との現実の関係を、自分の想像力の中で歪めてしまうところからはじまる。看護師は一旦現在の患者の介護をやめようと思ったものの、看護師紹介

所の職員ミセス・ヒクソンとのやりとりの中で、もう一度担当を続けようと思ひ直す。看護師の思い直しは、表面的には患者とケアという関係を再び始める行為のように見える。しかし、ここで見逃せないのは、彼女が自分と患者との関係を、藤生真梨藻が言う「ロマンチック」（藤生 46）なものに変換させてしまうことである。

The nurse's brown eyes were alight with a mixture of thoughts—the movie she had just seen about Pasteur and the book they had all read about Florence Nightingale when they were student nurses. And their pride, swinging across the streets in the cold weather at Philadelphia General, as proud of their new capes as debutantes in their furs going in to balls at the hotels. (“Alcoholic” 27)

ここで看護師は、彼女のロマンチックな想像力を通して、自らを映画や伝記の登場人物と同一視し、彼らを映画や伝記に出てくる反復可能な「ケース (case)」として一般化してしまう。言い換えれば、その時の看護師と患者にしかなかったはずの個別性は徹底的に排除され、「この看護師」と「この患者」という関係は、一般化された「看護師」と「患者」との関係になってしまうのである。ジョージ・モンテイロが指摘しているように、作中の他の人物が固有名詞で呼ばれているのに対し、中心人物であるはずの看護師と患者のみ名前が与えられていないことは、この一般化による個別なもの消去という事態を表している。

一般化による個別性の消去は、看護師が再び患者のホテルに戻るときの心情にも現れている。患者がいるホテルに入るとき、看護師の心情は次のように描写される。“She was going to take care of him because nobody else would, and because the best people of her profession had been interested in taking care of the cases that nobody else wanted” (“Alcoholic” 28)。この心情描写において、前半の「他の誰もやらないから、私が彼の面倒を見るんだ」という部分は、ギャツビーの死後のニックの言葉を思わせ、『グレート・ギャツビー』で描かれたケアの関係を想起させるようにみえるかもしれない。しかし直後、彼女は自分がケアをする患者を、自分の職業の偉大な先達たちがみてきた患者というかたちで一般化する。ここでもやはり、患者がもっているはずの個別性は失われ、看護師が向き合うのはあくまでも「一つのケース」となってしまう。

傷つきやすさをめぐる個別なものとの関わりは、文字通り、看護師の前に患者の戦争の傷が露わになる場面においてハイライトを迎える。ホテルに戻った看護師が患者の着替えを手伝う場面、彼女がアンダーシャツを引っ張り上げると、患者はふ

ぎけて火がついている煙草を自分の胸元に押し当てる。戦争で傷を負っていた患者のそこには銅板が入っており、患者は火傷を負うことなく火は消える。この銅板は、患者に傷を負わせないという点で、一見すると傷つきやすさの対極にあるものにみえる。しかし、直後に飛び散った火花を腹に浴びた患者が「あちっ！」と声をあげるといふ展開は、ユーモラスさの裏返しによって、逆に患者が戦争で負った傷の痛々しさを強調するものになっている。その露わになった傷つきやすさをめぐりやりとりは、個別性の消去という事態を再び喚起させる。「これは治らない。銅板だからね」と、同じようにユーモアに傷つきやすさを含ませた患者の言葉に対し、看護師は“*Well, it's no excuse for what you're doing to yourself*” (“*Alcoholic*” 30)と答える。この看護師の言葉は、名詞の“*excuse*”という表現とともに、患者が今していることを正当化する理由が何かほかにありうるという可能性を暗示する。そこには、看護師の患者に対する態度の中に、明確な原因と結果という枠組みが潜んでいることが仄見える。傷つきやすさがユーモラスさの裏返しとして決定的に露わになる場面において、看護師の個別なものからの逃避もまた露わになっている。

看護師が最終的には患者の傷つきやすさから逃避していることは、患者の死をめぐり最終的な結論の曖昧さにみることができるといえる。一方で患者は、『医療短編小説集』の「解説」において石塚が論じているように、最終的には自殺をしまっているように読める面があるのは確かである。冒頭の“*All right, drink your fool self to death*” (“*Alcohol*” 23)という看護師の言葉を伏線に、ガラスの破片を自殺の道具として隠し持っていたことを示唆する描写を経て、最後に看護師が患者から死の予感を感じるという一連の展開は、患者が最終的にはその隠しもっていた破片で自殺したという読み方に読者を十分に誘う。だがその一方、作品の結末で場面は急転し、突然として次の日の看護師紹介所のヒクソンとの会話の場面となる。そこでは、死の意志を宿したという患者が結局どうなったのか、バスルームにあったガラスの破片で自殺をしたのかという点は、最後まで不明瞭なままである。看護師がミセス・ヒクソンに伝えるのは、次の曖昧な言葉だけである。“*This one could have twisted my wrists until he strained them and that wouldn't matter so much to me. It's just that you can't really help them and it's so discouraging—it's all for nothing*” (“*Alcoholic*” 31)。看護師のこの言葉は、死という傷つきやすさの最たるものの隠蔽が、個別なものからの逃避となることを伝えている。現実には死を迎えたのかどうか曖昧なまま、冒頭において“*him*”と名指しされていた患者は“*This one*”に変わり、さらに次の文で“*them*”という「アルコール依存症の患者」一般というかたちになっている。この一般化された「彼ら」は、個別性を剥ぎ取られた抽象的な「ケース」という意味で、決して

傷つくことがない。この点は、そもそもこの急転された場面が、看護師紹介所、すなわち、看護師と患者が互いに「交換可能である」存在となる場であることによって強調されている。ここでは、看護師が患者のその後の運命に直接言及しないことそれ自体が、彼女が患者の傷つきやすさから逃避し、それゆえにケアという関係に至らなかったことの表現になっている。

こうして「アルコール依存症の患者」は、看護師が傷つきやすさから逃避し、個別なものへの応答へ至らなかった作品として読むことができる。ただそのうえで、最終的に看護師の一連の行為を完全に否定的なものとして読むことには留保が必要だろう。事実、結末において自分の無力さを嘆く看護師は、それまでのロマンチックな想像力では対処しきれないものに直面することで、自分自身と患者の両方の傷つきやすさにもう一度出会い直しているとも言える。何よりも、その傷つきやすさを認識しながら、彼女がその後に患者の担当を変わってしまうのかどうか明らかにされていない。であれば、看護師はケアという主題において否定されるべき登場人物であるというよりも、ケアの前提となるべき条件を明らかにしながら、その困難さこそを伝えるという役割を担っているとも言える⁸。事実、フィッツジェラルドは、傷つきやすさを通して露わになる個別なものにどう応答するかという問いを、この作品だけで終わらせてはいない。その意味で看護師は、次に論じる「家族は風の中」がその典型的な例になっているように、フィッツジェラルドが作家として描き続ける困難な問いを提示するという、むしろ重要な役割を担っている。

3. 「家族は風の中」——傷つきやすさとの対峙、個別なものへの応答としての「家族」になること

「アルコール依存症の患者」は、傷つきやすさとの対峙することを回避してしまう看護師を描くことで、個別なものへの応答としてのケアの困難を提示した作品としてある。しかしそれは、2017年の拙論のケア論に立ち返って言えば、傷つきやすさとの対峙することは、否定的な意味のみならず、ケアという関係が生まれる契機になるということでもある。「家族は風の中」という作品は、まさにそうした傷つきやすさとの対峙が契機となっており、個別なものへの応答としてのケアの物語として読むことができる。

この作品は、医師でありながら今は酒に溺れているフォレスト・ジャニーが、喧嘩で大怪我を負った甥のピンキー・ジャニーに対し、その治療を拒むというエピソードから始まる。以前フォレストは、メアリー・デッカーという少女に密かに思い

を寄せていたのだが、メアリーはあるとき餓死してしまい、フォレストはその原因がピンキーにあると考え、そのためにピンキーの治療を拒否している。このフォレストのピンキーに対する態度は、まさに國分がいう、「犯人探し」としての責任をピンキーに見出す行為といえる。ただここで、特に作品全体のケアをめぐる主題を考えるうえで重要なのは、フォレストがピンキーに対して強烈な憎悪とともに見出している明確な責任が、実はそれほどはっきりしたものではないということである。作品の語りは、フォレストがアルコール依存症であることを冒頭で印象づけた後、対照的にアルコールに溺れていない弟のジーン・ジャーニーを登場させつつ、フォレストの判断の正当性に疑問をもたせる会話を挿入している。

“I’ll do nothing myself to help him, because he ought to be dead. And even his death wouldn’t make up for what he did to Mary Decker.”

Gene Janney pursed his lips. “Forrest, you sure about that?”

“Sure about it!” exclaimed the doctor. “Of course I’m sure. She died of starvation; she hadn’t had more than a couple cups of coffee in a week. And if you looked at her shoes, you could see she’d walked for miles.”

“Doc Behrer says—” (“Family” 89)

ジーンはフォレストの見解とは異なるベラー医師の見解も述べようとするのだが、フォレストはそれを強制的に遮り、自分の立場を決して変えようとしない。言うまでもなく、この会話だけではどちらが正しいかを判断することはできない。ただ確かなのは、アルコールに溺れていないジーンからの“*Forrest, you sure about that?*”という問いかけが示唆するように、フォレストがピンキーに見出す責任の裏に、何かしらの複雑な事情があったかもしれないという可能性である。フォレストがピンキーに見出している責任とは、そうした複雑な事情の可能性を無視することによって、はじめて明確なものになる。それは、本論文の文脈から言えば、ピンキーをわかりやすい「犯人」にしたてあげ、「明確な理由」からなる責任を押しつけるという意味で、傷つきやすさからの逃避とも言い換えられるだろう。再びギルソンを援用すれば、傷つきやすさの経験とは、誤謬性、変容性、予測不可能性、コントロール不可能性の現実の中で、原因と結果という安定した構図の中にある、自己の確実性が揺るがされることである。であるならば、フォレストのピンキーに対する態度とは、そうした揺るぎに対して明確な原因と結果の図式を当てはめることで、ピンキーの傷つきやすさを徹底的に無視するものにほかならない。

このフォレストに対し、物語後半の竜巻をめぐるプロットは、それまで目を背けていた傷つきやすさに再び対峙させるものとしてある。竜巻とは、石塚が論じているように、「平穏な日常を突如打ち破る」(石塚 359) という意味で、原因と結果によって明確につながる時間を打ち破るようにして訪れ、人間を否応なく受動的な立場におくもの、すなわち、人間の傷つきやすさを強制的に露呈させる出来事であるからだ。ピンキーの兄であるブッチによって体験される竜巻は、次のように描写される。“First there was the sound, and he was part of the sound, so engulfed in it and possessed by it that he had no existence apart from it” (“Family” 94)。ここでブッチは、呑み込まれ、支配される側にあり、自分の存在の境界を強制的に曖昧にされてしまう。この意味で竜巻は、冒頭のエピソードにおいてフォレストが排除していた人間の生の傷つきやすさを、暴力的に露呈させる。

もちろん、この竜巻による傷つきやすさの露呈とは、人間の生が文字通り破壊されるという意味で、避けるべきものであることは確かである。しかし作品が描くのは、それは同時に、確固たる自己が揺るがされることで、その自己が開かれるという可能性である。竜巻発生直後、怪我人の手当をするフォレストは、それまでの自分の好き嫌いの感情を超えて、ベラー医師に協力を求め、ベラー医師もまたそれに自然に応える。“The two men stood face to face by lantern light, forgetting that they disliked each other” (“Family” 95) という描写にあるように、一方では自己のあり方が揺さぶられるという否定的に思われる災害という事態が、他方では二人の自己完結的な態度に開かれをもたらし、ひとつのつながりを生む契機になっている。“God knows how many more there’s going to be” (“Family” 96) と述べるフォレストは、この時点において語り上の呼び方が“*Forrest*”から“*Doc Janney*”へと変化していることにも明らかなように、明確な原因と結果によって現実をみていた以前のフォレストではなく、「医師」という傷つきやすさと向き合う存在に変わっている。

この傷つきやすさの露呈において重要なのは、それがそのまま個別なものの露呈を同時にもたらすということである。竜巻のあとにフォレストがみた惨状は、一般化された傷という抽象的なものではなく、それぞれの個別性が執拗に強調されていく。“The storm had dealt out fractures of the leg, collar bone, ribs and hip, lacerations of the back, elbows, ears, eyelids, nose; there were wounds from flying planks, and odd splinters in odd places, and a scalped man, who would recover to grow a new head of hair” (“Family” 97) という描写は、コンマと名詞の多様によって、傷つきやすさが予測できない経験であるがゆえに、個別性が否応なしに浮き彫りになっていく事態を表している。

一方で竜巻がもたらしたこの断片化された身体の列挙は、元々は個別な身体を備えたそれぞれの人間を一挙に襲い、それを匿名性へと変えてしまう暴力のあり方を表しているだろう。だがここで重要なのは、傷つきやすいものに対峙する「医師」となったフォレストからみれば、それらはどこまでも具体的に対処すべき個別な対象となっていることだ。

Living or dead, Doc Janney knew every face, almost every name.

“Don’t you fret now. Billy’s all right. Hold still and let me tie this. People are drifting in every minute, but it’s so consarned dark they can’t find ’em—All right, Mrs. Oakey. That’s nothing. Ev here’ll touch it with iodine. . . . Now let’s see this man.” (“Family” 97)

竜巻の暴力によって一旦は匿名化された身体に対して、医師としてのフォレストは、“every”という形容詞によって示唆されているように、それぞれの個別性を知る者として現れている。「ビリー」「オーキー」「イヴ」という固有名詞、そして最後の“this man”という特定の呼びかけは、その個別性の回復を目指した何よりの実践であるだろう。「アルコール依存症の患者」における看護師とは極めて対照的に、フォレストが「ジャニー医師 (Doc Janney)」として扱う患者は、一般化されることから救い出されるべき、個別な対象としてある。

この傷つきやすさを通じての個別性との対峙は、フォレストのピンキーとの関係において、責任から応答へという決定的な変化をもたらす。竜巻に巻き込まれた患者の一人としてピンキーを手当てすることになったフォレストは、傷ついたピンキーを目の前にし、他の患者と同じように彼の診断を行うことを余儀なくされる。ここでもまたフォレストは一つの個別なもの向き合うことになるのだが、何よりも見逃せないのは、フォレストが向き合うその個別性は、メアリーの死の責任を負ったピンキーでは決してないことである。そもそもフォレストがピンキーにメアリーの死の責任を見ていたのは、フォレストの知り得ない事情があったという可能性を無視していたこと、すなわち、ピンキーがそもそも持っていた傷つきやすさを無視していたことに大きな要因があった。その意味で、この竜巻で負傷したピンキーとの対峙は、フォレストがそれまで見ないことにしていたピンキーの傷つきやすさとの対峙にほかならない。それは必然的に、それまでのフォレストのピンキーに対する関係を変えることになる。

For a moment the doctor hesitated, but even when he closed his eyes, the image of Mary Decker seemed to have receded, eluding him. Something purely professional that had nothing to do with human sensibilities had been set in motion inside him, and he was powerless to head it off. (“Family” 98)

自分でもどうしようもできなかつたと言っているように、ここでフォレストは、それまでのピンキーに責任をみるという態度を、自分の意志とは無関係に、自分が応答しなければならないという態度に強制的に変えられる。バトラーの“responsibility”をめぐる次の考察は、この責任から応答へというフォレストの変化の正確な説明になっている。

In a certain way, and paradoxically, our responsibility is heightened once we have been subjected to the violence of others. We are acted upon, violently, and it appears that our capacity to set our own course at such instances is fully undermined. Only once we have suffered that violence are we compelled, ethically, to ask how we will respond to violent injury 9. (Butler 16)

この最初の竜巻でのフォレストの変化は、しかし、フォレストの職業である「医師」としての「自動的な返事」にすぎず、完全な意味での個別なものへの応答にはなっていないのではないか、という反論はありうるだろう。「ジャーニー医師」という表記や、彼の中に湧き上がってきたものに対する“Something purely professional” (“Family” 98) という表現は、そうした反論の十分な論拠となりうるものである¹⁰。このいわば中途半端な状態から完全な意味での個別なものへの向き合いへの変化は、その後に展開される孤児のヘレンを通してなされると言ってもよい。最初の竜巻の後、フォレストはもともと顔馴染みだった少女ヘレンと再会し、そこで彼女が父親を失いながらその事実を知らないことにショックを受ける。誰もケアをする人がいないという状態のヘレンに、フォレストは「真っ暗な宇宙 (the dark universe)」（“Family” 100) が広がっているのを感じるが、それはフォレストの立場からすれば、フォレスト自身もまた彼女をケアする明確な理由がないということにほかならない。フォレストはヘレンと何の血縁関係もないため、家族としての責任を果たす必要はない。そしてまた、現状のヘレンは傷を負っていないため、医師として対応する必要もない。その意味で、ここにおいてフォレストは、真に個別なものとしての傷つきやすさと向き合っている。

フォレストは、他人であるゆえにケアをする必要がないと割り切ることも、医師として関わることもできないでいる。その中途半端なフォレストの態度を個別なものへの応答に変えるのが、ヘレンの猫に対する態度である。最初の竜巻の際、ヘレンは父親に助けられながら、同時にヘレン自身は一匹の猫を救っており、その後も引き続き面倒をみていた。「親戚はいなくとも猫がいるんだね」とフォレストは冗談めかして言うが、それはヘレンをケアする人が誰もいないという切実な状況の裏返しにほかならない。だがそれに対するヘレンの次の返答は、フォレストが彼女に感じた「真っ暗な宇宙」というイメージを揺さぶらずにはいない。“It’s just a cat,’ she admitted calmly, but anguished by her own betrayal of her love, she hugged it closer” (“Family” 101)と描写される一連の言動は、彼女にとってその猫が「ただの猫 (just a cat)」でありながら、自身の言葉を直ちに行動で否定するように、それが彼女にとってどこまでも個別性を備えたものであることを示している。続けて、“Taking care of a cat must be pretty hard” (“Family” 101) と、その猫を“a cat”として一般化するフォレストに対しても、“It isn’t any trouble at all. It doesn’t eat hardly anything” (“Family” 101)と答えるヘレンは、「ただの猫」であるはずの猫の個別性にどこまでも応答している。重要なのは、このヘレンの猫に対する態度は、そのままフォレストのヘレンに対する態度へ伝染していくことだ。“He put his hand in his pocket, and then changed his mind suddenly” (“Family” 101)と明確な変化が起こったことを明示しつつ、フォレストはヘレンに今日中にもう一度彼女に会いに戻ってくることを約束する。先にフォレストがヘレンに見出した孤独なイメージは、ここで、「誰に頼まれたわけでもない」にもかかわらず応答するというケアの実践に決定的に変化している。

個別なものへの応答は、二度目の竜巻の後、フォレストがヘレンを養子として引き取る決意をする結末にそのハイライトを迎える。二度目の竜巻はフォレストのドラッグストアも破壊し、彼は弟のジーンをはじめとする親戚がいるその地を去ることを決意する。語り手はそうした状況を“for many families things would never be the same” (“Family” 104)と説明するが、フォレストにとってのそれは、文字通り家族というあり方それ自体の変容を意味している¹¹。出発する前、フォレストは周囲からヘレンの状況を聞き出し、彼女が猫と一緒にモンゴメリーに移ったことを知る。そしてモンゴメリー行きの切符を買い、汽車の中でヘレンを猫と一緒にひとつの「家族」として迎え入れる決意をする。“She hasn’t got any kin. I guess she’s my little girl now” (“Family” 106)という彼のその決意を表す二つの文は、何よりも、その間に明確な理由が欠けているという点によって特徴づけられるだろう。冒頭においてピンキーに

責任を見出していたフォレストは、この新たな旅立ちの中で、明確な理由なしに応答するものになっている。さらにそれは、旅立ちの場面以降、彼の呼び名が「医師 (the doctor)」から一貫して「彼 (he)」へと変化しているように、「医師」としての「自動的な返事」とも異なっている。“I guess the old brig can keep afloat a little longer—in any wind”(“Family” 106)という彼の結びの言葉は、それ自体は極めて頼りないものに思えるが、まさにその頼りなさこそが、彼が自身の傷つきやすさから目を逸らしていない証拠である。その傷つきやすさとは、自己をひとつの開かれへと導く、個別なものへの応答としてのケアのはじまりを示している¹²。

おわりに

2017年の拙論は、「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」というテーマを、あくまでも『グレート・ギャツビー』をめぐる作品論として論じたものだった。本論文はそこに、ケアの内実として「個別なものへの応答」という主題を追加することで、ケアのはじまりとしての傷つきやすさという主題が、「医療短編小説」として日本語訳が出された二つの作品を読む有効な視点となることを論じた。「はじめに」で述べたように、もともとフィッツジェラルドの作品は、壊れるもの、移ろいゆくもの、割れるものといった、傷つきやすさのモチーフに溢れている。であるならば、フィッツジェラルド作品をケアのはじまりとしての傷つきやすさから読み直すことは、限定された一部の作品や文脈を超え、フィッツジェラルドという作家それ自体を大きく照らしだすことになりうるのではないか。フィッツジェラルドが生きた時代からすでに一世紀となる現在、「テロ」をめぐる「暴力」、災害、ウィルスによるパンデミックという一連の出来事が改めて人間の生の傷つきやすさを露出させていることを考えれば、その現代的な意味は大きい。

注

本論文は、科学研究費補助金 (21K00348) の助成を受けた研究成果の一部である。

¹ “Open to attack or injury of a non-physical nature; esp., offering an opening to the attacks of raillery, criticism, calumny, etc” (OED, “Vulnerable”).

² 特に Judith Butler, *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence* (2004) 以降の論考を参照。

³ Gilson の 2 頁を参照。

- 4 ケアに関わる近年の論考は、ここで本論文が「個別なもの」という表現で論じようとするものに何らかのかたちで関わっている。ここまで引用してきた論者に限っても、バトラーの「この生」、國分の「予測誤差」、村上の「現象学的な質的研究」などがあり、本論文の主題はこうした論考に多くを負っている。
- 5 ニックが感じるギャツビーの個別性は、この作品において常に言われてきたロマンチズムとリアリズムの問題と密接に関わっている。現在までの優れた批評が明らかにしてきたように、『グレート・ギャツビー』は、語り手ニック・キャラウェイの語りを精査することで、「リアリスティックなニック/ロマンチックなギャツビー」という単純な構造ではなく、むしろ逆に、ロマンチックな「ニックの物語」から逸脱するリアリスティックなギャツビーが立ち現れてくる。本論文のいう「個別なもの」としてのギャツビーは、そうしたニックの「意味」の外にいるギャツビーであるといつてよい。
- 6 Gilson の 2 頁を参照。
- 7 Monteiro の 112 頁を参照。
- 8 アーサー・ウォルドホーンもまた、看護師と患者の双方ともに非難されるべき要素を挙げながら、看護師の患者に対する両義的な感情を取り上げ、最終的に看護師の患者に対する態度が、「非難と思いやり (censure and compassion)」の両方に値するというフィッツジェラルドの思いを表しているのではないかと結論づけている。Waldhorn の 252 頁を参照。またこの意味で、“An Alcoholic Case”という不定冠詞付きのタイトルは、看護師にとって患者が「一つのケース」であるという意味ではなく、むしろ全く逆に、看護師が体現するケアの困難さを通じて、実のところ患者の個別性こそを反語的に強調しているのではないかと、という解釈もありうる。
- 9 バトラーの論考は、具体的に 9・11 に端を発するグローバルな「暴力 (violence)」をめぐるものであり、多分に政治的な意味合いが込められている。それゆえ、このバトラーの論考を自然災害という非政治的な暴力と重ねることは、一見すると不適切にみえるかもしれない。だが、バトラーの一連の論考が、嘆きうる生とは何か、人間とみなされる存在とは何かといった問いに対する「存在論のレベルでの抵抗 (an insurrection at the level of ontology)」(Butler 33)であることを踏まえれば、それが狭い意味での政治的な文脈に収まらない射程を備えていることは確かである。
- 10 この点については、本論文のもとになる口頭発表の質疑応答において、藤生真梨藻氏および上西哲雄氏より指摘をいただいた。
- 11 石塚が『医療短編小説』の「解説」で言及しているレベッカ・ソルニットは、『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』において、サンフランシスコ地震をめぐる当時の文献の中からメアリー・オースティンのレポートの一節を抜き出し、自身の言葉で“the people of San Francisco became houseless, but not homeless” (Solnit 23)とまとめ直している。災害時における“house”と“home”についてのこの印象的な言い回しは、「家族は風の中」という作品とも共鳴しつつ、ソルニットの著書全体の主題となっている災害時に立ち上がる共同体の問題が、「家族」という主題と不可分に結びついていることを示唆している。

¹² 内田勉がこの作品に見出す次の「逆説的な真理」もまた、本論文が提示する傷つきやすさの両義性と結びついている。「弱いものをより強いものが守る。しかし、傷ついた子猫が、Helen に嵐の中を一人で何マイルも歩く勇気を与え、また、Helen が、呑んだくれの中年男に生きる希望を与え、禁酒までさせる力を秘めているように、弱いものがより強いものを助け、支えるという逆説的な真理をこの作品は最後に教えてくれるのである」（内田 251）。

引用文献

- Butler, Judith. *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*. Verso, 2004.
- Fitzgerald, Scott. “An Alcoholic Case.” 1937. *The Last Decade*, edited by James L. W. West III, Cambridge UP, 2008, pp. 23-31.
- . “Family in the Wind.” 1932. *Taps at Reveille*, edited by James L. W. West III, Cambridge UP, 2014, pp. 87-106.
- . *The Great Gatsby*. 1925. Scribner, 1995.
- Gilson, Erinn C. *The Ethics of Vulnerability: A Feminist Analysis of Social Life and Practice*. Routledge, 2014.
- Monteiro, George. “Fitzgerald vs. Fitzgerald: ‘An Alcoholic Case.’” *Literature and Medicine*, vol. 6, 1987, pp. 110-16.
- Solnit, Rebecca. *A Paradise Built in Hell*. Penguin, 2009.
- “Vulnerable.” *Oxford English Dictionary*. 1989.
- Waldhorn, Arthur. “The Cartoonist, the Nurse, and the Writer: ‘An Alcoholic Case.’” *New Essays on F. Scott Fitzgerald’s Neglected Stories*, edited by Jackson R. Bryer. U of Missouri P, 1996, pp. 244-52.
- 石塚久郎「解説」石塚久郎監訳『医療短編小説集』平凡社、2020年、311-69頁。
- 井出達郎「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ——F. スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』における傷からのつながり」『東北アメリカ文学研究』第40号、2017年、17-29頁。
- 内田勉「悔いと償い、そして再生——F. Scott Fitzgerald の“Family in the Wind”について」1998年、内田勉『学ぶこと、伝えることの難しさ——内田勉 自撰論文集』英宝社、2021年、237-52頁。
- 國分功一郎、熊谷晋一郎『＜責任＞の生成——中動態と当事者研究』新曜社、2020年。
- 藤生真梨藻「フィッツジェラルドとアルコール」『フィッツジェラルド研究』(4)、2021年、45-49頁。
- 村上靖彦『ケアとは何か——看護・福祉で大事なこと』中公新書、2021年。

鷺田清一『「聴く」ことのか——臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ、1999年。
渡邊俊「戦争状態」にさらされる医療行為者たち『フィッツジェラルド研究』(4)、2021年、39-44頁。

Vulnerability as the Beginning of Care in F. Scott Fitzgerald's Works:

Responsibility to the Singularity of the Vulnerable in "An Alcoholic Case" and "Family in the Wind"

This paper aims to read F. Scott Fitzgerald's "An Alcoholic Case" and "Family in the Wind", the two stories that were translated into Japanese in 2020 as literary works of medical humanities, through the lens of vulnerability as the beginning of care, the main concept discussed in my 2017 paper on *The Great Gatsby*, "Vulnerability as a Beginning of Care." Although vulnerability is generally considered to be a negative predisposition that exposes one to violence, my 2017 paper presents *The Great Gatsby* as a story about vulnerability as an openness that leads one to care for others. This paper demonstrates that this concept of vulnerability is useful in reading the two stories as it adds a new perspective, that of care as one's responsibility to the singularity of the vulnerable, which can be seen in Nick's sense of "responsibility" that stems from his realization that he is the only one who is on Gatsby's side at his death. The two stories revolve around caring as a responsibility to the singularity of each individual. "An Alcoholic Case" suggests the difficulty of care, in which the patient is finally reduced to simply "a case," not "this case." Meanwhile, "Family in the Wind" depicts a successful practice of care, in which a new familial structure is constructed through a sense of responsibility to the singularity of the vulnerable. This reading of Fitzgerald's works shows a possibility that vulnerability as the beginning of care can be a noteworthy question in Fitzgerald's works with their deep significance in medical humanities today.